HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道方言の韻律的な特徴に関する記述的研究 ： 北海道方言の名詞アクセントについて
Author(s)	ダリン, トーマス
Citation	研究論集, 15, 229(左)-252(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l229
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60568
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_018_dallyn.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.15.l 229

北海道方言の韻律的な特徴に関する記述的研究

── 北海道方言の名詞アクセントについて ──

ダリン　トーマス

要　旨

本稿では，北海道諸方言の韻律的を明らかにするための一歩として北海道の 4 つの方言（札幌・網走・小平・七飯）を対象に，それぞれの方言における和語名詞のアクセントを記述し，指摘できるパターンを分析した。

その結果，話者が若いほど全国共通語と一致するアクセントを使う傾向があきらかになった。つまり，北海道方言においてアクセントの共通語化が進行中である。この傾向は 2 モーラ名詞のアクセントにおいて最も顕著である。第Ⅱ類語（冬，川，石など）では，本来のアクセント（平板型）が共通語と一致する尾高型に置き換えられつつある。また，北海道方言のⅣ・Ⅴ類語(味噌，海，肩，秋など）では，2 モーラ目の母音の性質によってアクセントが変わる現象があるが，この特徴は 40 代以下の話者に観察されなかった。さらに，調査によって共通語化の程度が異なることも分かった。要するに，札幌や網走に比べて，道北地方の小平町と道南地方の七飯町ではアクセントの共通語化の進歩が遅れているようである。

3 モーラ名詞のアクセントにおいて個人差が大きく，一貫した傾向は指摘できなかったが，札幌・網走の方言の名詞の一部において話者の年齢と関わるアクセント変化が観察された。ただし，ある特定の語彙において，若年層の話者でも共通語と異なるアクセントを使う傾向があった。

1．はじめに

北海道方言は，日本列島の方言の中で特殊な地位を占める。要するに，他の府県や地方と異なり，方言の地域的な連続性はなく，比較的歴史の浅い方言である(柴田，2003)。現在の北海道方言の姿は，明治時代に始まったプロセスの結果であると考えられる。明治政府が成立してから，北海道全般において本格的な開拓が始まり，大勢の入植移民が集まった。さらに，日本

各地からの移住者が混じり合い，「地域共通語」としての北海道方言が生まれるに至った。終戦以降，この地域共通語がますます東京方言の影響を反映するようになったとされている。

本稿では，１～３モーラの和語名詞のアクセントに焦点を当て，こうした影響を受けた北海道方言の現状や動態を明らかにすることを目的としている。筆者自らで行った北海道の４つの方言（札幌・網走・小平・七飯）の現地調査から得たのデータに基づいて，それぞれの方言のアクセント特徴を示し，観察された傾向について述べる。

第２節では，北海道諸方言のアクセントに関する先行研究をまとめ，第３節では調査語彙項目やインフォーマントの情報など調査方法について概説する。第４節では４つの調査（札幌・網走・小平・七飯）から得た結果を示す。第５節では，四つの方言の特徴を照らし合わせながら，全体的に対照考察し，最後に第６節でまとめと今後の研究課題について述べる。

２．先行研究

先述のように，北海道方言は日本各地の方言から影響を受けてきたため，方言の系統を指摘することが難しい。決定的な位置づけは，文法・音韻・語彙などにも関わるため，本稿の扱う範囲を超えている。しかし，今日につながる北海道方言の性格に最も影響を及ぼしたのは，東北の人々であったというのが定説である（竹本，2008）。また，柴田（2003）が触れているように，その影響の程度によって北海道方言を２つに下位区分することができる。道南地方および日本海・太平洋の海岸部地帯で話されている「海岸方言」（いわゆる「浜ことば」）において北奥羽方言の影響がまだ根強く残っているのに対して，内陸部で話されいている「内陸方言」はより東京方言（全国共通語）に近いとされている。このコントラストはそれぞれの開拓プロセスを反映していると考えられる。海岸・内陸の中でも地域差がみとめられる。海岸方言に関して，道南以外の海岸地帯では海岸方言の色彩が薄くなり，内陸方言との共通点が多い。また，その色彩がまだ強い道南地方においても，差異が認められる。簡単に言えば，函館周辺は青森県下北半島の方言の影響が強いのに対して，松前周辺は津軽方言が有力で，関西方言の影響も反映されているという。内陸は，空知地区の炭鉱地帯（赤平，歌志内，三笠，夕張など）において海岸方言の要素が多いとされている（国立国語研究所，1965）。その上，札幌をはじめとする大都市と，農村とは若干の違いがある（石垣，1983）。以上をまとめると，表１のようになる。

表１：北海道方言の下位分類（出典：石垣（1983））

<table>
<tr><td rowspan="5">北海道方言</td><td rowspan="3">海岸方言</td><td rowspan="2">渡島半島方言</td><td>道南方言</td></tr>
<tr><td>松前方言</td></tr>
<tr><td>道東・道北・オホーツク海岸方言</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">内陸方言</td><td>炭鉱地帯方言</td><td></td></tr>
<tr><td>農村地帯方言</td><td></td></tr>
<tr><td>都市方言</td><td></td></tr>
</table>

なお，北海道方言の系統的な位置づけは不明であるとされているが，方言のアクセント特徴によって，日本の諸方言の中で区分することは可能であると考えられる。平山（1957）は，一部の言語島（新十津川，重内など）を除いて「北海道・樺太方言の音調（東京式Ⅰ）は奥羽方言の東京式Ⅰにきわめて近いものである」と述べている。金田一（1977）によると，北海道は北奥羽と房総半島の北部とともに，外輪東京式アクセントの変種である。最後に，新明解日本語アクセント辞典（2004 年版）のアクセント分布図（金田一春彦作図による）では，北海道は北奥羽，新潟県北部，房総半島北部，島根県の出雲地方，福岡の筑前地方などと一緒に「東京式アクセントの変化」に属している。

しかし，上野（1989）が述べているように，「これらの分類基準が明確ではなく，（中略）共時的なタイプの分類なのか，歴史的（系譜的）な分類なのか，その出発点から分明ではなく，人によって指す内容がかなり異なるからである」。同氏が提案した，共時的な特徴のみに基づいた分類を使うと，内陸・海岸方言ともは多型アクセント，式のない，文節非関与のアクセント体系である。*n* モーラ名詞の場合は，アクセント対立の数は *n*＋*1* である。要するに，アクセント体系そのものは全国共通語と同じであり，この点について変化が起きている様子はない。しかし，アクセント型の所属語類[1] に関しては，大幅な変遷に言及する先行研究が数多くある。以下，先行研究による語類とアクセント型の対応関係を見てみよう。

2.1. 1 モーラ名詞

1 モーラ名詞に関しては，平山（1957）は釧路，網走を含めた道北の方言と帯広，札幌を含めた道南の方言の間に区別をつける。前者は，Ⅰ・Ⅱ類が⓪，Ⅲ類が①であり，東京方言と一致している。同じ地方の根室方言もこの傾向に準ずる（小野，1993）。後者は，Ⅱ類が①になり，Ⅲ類と統合している。尾崎（1984）も札幌の高齢層の話者において指摘した。しかし，同書によると，青年層において①への一型化の傾向は阻止されている。それに伴い，最近の研究においてこのような傾向が見られない。例えば，帯広について，竹本（2010）は「平山（1957）で示された伝統的な体系は姿を消し，Ⅱ類が①ではなく，⓪となる」と述べている。

---

[1] 語類とは，平安時代後期の京都方言のアクセントにより，金田一（1973）が 1 モーラ～ 3 モーラの和語を分類したものである。1 モーラ名詞には 3 つの類があり，2 モーラ名詞は 5 類があり，3 モーラ名詞には 7 類ある。同じ類に属している語は同じアクセント型に発音される。例えば，東京方言では，2 モーラ名詞Ⅰ類の 「紐」「星」「道」などは全て⓪で発音される。ある語においてアクセント型の変化が起きたときには，同じ類に属する語彙も同じ方向に変化するとされている。そのため，語源において全然関係のない語の群が，一類をなして，A 方言ではそろって A 型に属しており，B 方言ではそろって B の型に属しているという事実がある（金田一，1973，p 57）。つまり，多くの方言の間に，各語類ごとに規則的な対応関係がある。

表 2：先行研究による語類とアクセント型の対応関係（ 1 モーラ名詞）

アクセント型 / 地域	⓪		①		
東京[2]	Ⅰ	Ⅱ			Ⅲ
帯広，札幌，函館（平山，1957）	Ⅰ			Ⅱ[3]	Ⅲ
札幌（老年層）（尾崎，1984）	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰの一部	Ⅱの一部	Ⅲ
釧路，網走，北見など（平山，1957） 札幌（青年層）（尾崎，1984） 根室（小野，1992） 古平（小野，1993） 帯広（竹本，2010）	Ⅰ	Ⅱ			Ⅲ

2.2. 2 モーラ名詞

内陸・海岸とも，語類とアクセント型の伝統的な対応関係は次のようである。Ⅰ類・Ⅱ類が⓪，Ⅲ類が②である。Ⅳ・Ⅴ類が 2 モーラ目の母音の性質によって分かれており，広いもの（/a/，/e/，/o/）は②であり，狭いもの（/i/，/u/）は①である。しかし，竹本（2010）などの最近の調査は，東京方言と一致した結果を示す。

表 3：先行研究による語類とアクセント型の対応関係（ 2 モーラ名詞）

アクセント型 / 地域	⓪		①		②			
東京	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ		
内陸・海岸（平山，1957） 海岸・海岸（芳賀，1961）	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）
函館（小野，1993）	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）
小平（小野，1993）	Ⅰ	Ⅱ（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）
札幌・旭川・帯広（小野，1993）	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）
帯広（竹本，2010）	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ		

表 3 で見られるように，同じ時期に調査された函館・小平・札幌は異なる対応関係がを示す。函館では，伝統的なパターンが保っており，変りがない。道北の日本海沿岸に位置する小平町では，Ⅱ類の 2 モーラ目の母音の広い語が②となり，東京方言と一致するようになった。また，札幌・旭川・帯広などの内陸の都市では，Ⅱ類が②に安定している。当時は，Ⅳ・Ⅴ類が 2 モー

[2] 金田一春彦（監修），秋永一枝（編）（2004）『新明解日本語アクセント辞典』による

[3] グレー色でハイライトされたマス目は共通語と異なる所属を表す。

ラ目の母音の性質によって分かれる特徴が札幌などの内陸都市でも保たれていたが，竹本（2010）の帯広調査によると，現在は東京方言と一致するパターンが優勢である。

2.3. 3モーラ名詞

1・2モーラ名詞と比べ，3モーラ語のアクセント型においてばらつきが多い。例えば，古平方言に関して，小野（1993）は「4つのパターンが見られるが，その所属語にはかなりのずれがある」と述べている。表4が先行研究で報告された結果を示す。

表4：先行研究による語類とアクセント型の対応関係（3モーラ名詞）

アクセント型 / 地域	⓪	①	②	③
東京	Ⅰ Ⅲ Ⅵ	Ⅴ Ⅶ		Ⅱ Ⅳ
内陸（都市）（平山，1957）[4]	Ⅰ	Ⅶ	Ⅴ Ⅵ	Ⅳ
海岸（周辺地区）（平山，1957）[5]	Ⅰ		Ⅴ Ⅵ	Ⅳ
旭川（小野，1968）	Ⅰ Ⅵ	Ⅴ Ⅶ	Ⅲ	Ⅱ Ⅳ
奥尻（小野，1993）	Ⅰ Ⅱ	Ⅶ	Ⅲ Ⅵ	Ⅳ Ⅴ
古平（小野，1993）	Ⅰ Ⅵ		Ⅲ Ⅴ Ⅵ Ⅶ	Ⅱ Ⅳ
幌加内（小野，1993）	Ⅰ Ⅲ Ⅵ		Ⅳ Ⅴ Ⅶ	Ⅳ
帯広（竹本，2010）[6]	Ⅰ （Ⅱ） （Ⅵ）	Ⅴ	（Ⅳ）	（Ⅱ） （Ⅳ） Ⅵ

上記のように，明確な対応関係を定めることが難しい。しかし，大まかに言えば，Ⅰ類，Ⅳ類はそれぞれ⓪，③に安定している。Ⅱ類は③であるが，所属が不明な場合も少なくない。Ⅲ類は主に②であるが，いくつかの調査で扱われていない。Ⅴ類は②だが，①になる場合もある。Ⅵ類は主に⓪か②である。最後に，Ⅶ類はかなりまとまりが低いが，②か①である。主な傾向としては，共通語には少ない②が多く見られることが挙げられる。一方，①が比較的少ない。

[4] Ⅱ・Ⅲ類の所属は不明。

[5] Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ類の所属は不明。

[6] カッコが付いている類は型一つに決まらず，二つ以上の型に跨って記述した類である。Ⅲ・Ⅶ類の所属は不明。

3．調査方法

3.1．調査語彙

金田一（1974）および金田一（1975）の語類リストから以下の語彙項目を抜粋し，調査票を作成した。

(1)

1 モーラ名詞	Ⅰ類：	蚊，血，戸
	Ⅱ類：	葉，日，矢*[7]
	Ⅲ類：	木，酢，目

(2)

2 モーラ名詞	Ⅰ類：	海老，滝，烏賊，牛，皿，紐，蜂，蟹，酒，鼻
	Ⅱ類：	冬，川，旗，梨，橋，町，石，紙，肘，胸
	Ⅲ類：	山，栗，熊，犬，米，耳，舌，花，靴，馬
	Ⅳ類：	味噌，海，空，箸，糸，絹，肩，舟，針，鎌
	Ⅴ類：	牡蠣，猿，眉，秋，窓，蛇，蜘蛛，足袋，雨，鮭

(3)

3 モーラ名詞	Ⅰ類（形類）：	車，煙，桜，子供
	Ⅱ類（小豆類）：	小豆，娘，二つ，東
	Ⅲ類[8]：	黄金，小麦，岬，力
	Ⅳ類（頭類）：	頭，鏡，男，刀
	Ⅴ類（命類）：	涙，枕，油*，アワビ
	Ⅵ類（兎類）：	兎，狐，背中，鼠，
	Ⅶ類（兜類）：	苺，辛子，鯨，卵

金田一（1974）によると，1 モーラ語のⅠ・Ⅱ類が⓪であり，Ⅲ類が①である。Ⅱ類の「矢」は例外で，①で発音される。2 モーラ語のⅠ類は例外なく⓪である。Ⅱ類とⅢ類は②であり，Ⅳ類とⅤ類は①である。上記の調査語彙の中に例外はない。3 モーラ語は，Ⅰ類とⅥ類が⓪であり，Ⅱ類とⅣ類は③である。Ⅴ類は②であるが，「油」は例外的に⓪である。Ⅶ類は①であるとされている。

以上で述べた語類とアクセント型の対応関係は 70 年代の東京方言に基づいている。しかし，現代の共通語では，上記の＊がついている語彙以外にも例外的なアクセント型がある。表 5 は，金田一の語類リストで示しているアクセント型が現在のアクセント型と完全に異なる語彙であ

---

[7] ＊印の語彙は金田一（1973）によって対応の例外を成すとされているものである。

[8] Ⅲ類は金田一（1973）には現れない類であるが，金田一（1975）および北海道方言に関する先行研究（小野，1992 など）で扱われている。

る。例えば，3モーラ名詞のⅤ類に所属する語彙の多くは②から①に変わっている。

表5：共通語におけるアクセント変遷1（金田一（1974）と新明解日本語アクセント辞典（2008）の比較）

モーラ数	語類	調査語彙	アクセント型（金田一 1974）		アクセント型（新明解日本語アクセント辞典，2009）
3	Ⅴ	涙，枕，アワビ	②	→	①
	Ⅶ	辛子，鯨	①	→	⓪
		卵	①	→	②

表6の語彙は，金田一（1974）で示されているアクセント型以外に，他のアクセント型が認められているものである。この複数のアクセント型が併用される語彙の中で，主に若年層で使用されているアクセント型は(新)が付くものである。地域的に見られるアクセント型には(地)が付く。

表6：共通語におけるアクセント変遷2（金田一（1974）と新明解日本語アクセント辞典（2008）の比較）

モーラ数	語類	調査語彙	金田一 1974		新明解日本語アクセント辞典，2008
2	Ⅱ	梨	②	→	②・⓪（新）
	Ⅲ	熊	②	→	②・①（新）
3	Ⅱ	東	③	→	③・⓪（新）
	Ⅴ	刀	③	→	③・②（地）
	Ⅶ	苺	①	→	①　⓪（新）

3.2．インフォーマントの他

調査は2013年7から2014年7月の間にに札幌市，網走市，小平町，七飯町で行われた。調査方法としてはなるべく自然な発音を確認するため，また語につく助詞も発音してもらうため，調査票の語彙を使って短い文章を作成し，インフォーマントに音読してもらった。例えば，「蟹」の場合，「蟹が這う」という文章を言ってもらった。調査対象の名詞は和語87語である。その音声を録音し，ピッチ曲線の観察および発表者の聴覚印象に基づいて各例文の音調型を記した。この調査方法の大きな弱点としては，話者が自分の発音に注意を払い，自然発話と異なった「正しい」発音をする可能性が挙げられる。しかし，東京方言の形容詞アクセントを分析した小林(2003)がこのような効果を指示する決定的な証拠を見つからなかった。調査のインフォーマントとしては，(6)–(9)の24名を調査対象にした。インフォーマントを同定する文字列は地方(e＝網走，n＝小平，c＝札幌)，年齢，および性別（f＝女性，m＝男性）を表す。

札幌調査

(6)

ca30f	女性　30 歳 札幌市出身，現在札幌市居住	ci59m	男性　59 歳 札幌市出身，現在札幌市居住
cb33f	女性　33 歳 札幌市出身，現在札幌市居住	ce66f	女性　66 歳 札幌市出身，現在札幌市居住
cd62f	女性　62 歳 北海道樺戸郡月形町出身， 14 歳から札幌市在住	ch62f	女性　62 歳 札幌市出身，現在札幌市居住

網走調査

(7)

ea34f	女性　34 歳 網走市出身， 高校卒業から現在まで札幌市に居住。	eh69m	男性　69 歳 網走市出身，現在網走市に居住。
eb15m	男性　15 歳 網走市出身，現在網走市に居住。	ej61m	男性　61 歳 網走郡美幌町出身，高校卒業から網走市に居住。
ec50f	女性　50 歳 網走市出身，現在網走市に居住。	ek59f	女性　59 歳 興部町出身，中学校卒業から現在まで網走市に居住。
ee58f	女性　58 歳 網走市出身，現在網走市に居住。	el60f	女性　60 歳 網走郡大空町出身，中学校卒業から現在まで網走市に居住
ef58f	女性　58 歳 網走市出身，現在網走市に居住。		

小平調査

(8)

na52f	女性 52 歳 留萌市出身，現在留萌市に居住。	nb63m	男性　63 歳 小平町出身，現在小平町に居住。
nc47f	女性　47 歳 小平町出身，現在小平町に居住。		

七飯調査

(9)

sa59m	男性　59 歳　地方公務員 七飯町生まれ育ち，現在まで七飯町在住	sd60m	男性　60 歳　団体職員 函館市生まれ育ち，30 年七飯町在住
sb41m	男性　41 歳　地方公務員 函館市生まれ育ち，20 年七飯町在住	se41m	男性　41 歳　団体職員 松前町生まれ育ち，15 年七飯町在住
sc33f	女性　33 歳　地方公務員 七飯町生まれ育ち，現在まで七飯町在住	sf25f	女性　25 歳　団体職員 七飯町生まれ育ち，4 年海外滞在

4．調査結果

4.1. 1モーラ名詞

4.1.1. 札幌調査

多くのインフォーマントはⅠ類とⅡ類が⓪であり，Ⅲ類が①であった。しかし，cd62fはⅡ類の「葉」が①となり，Ⅱ類の用例の過半数が①であったことから，Ⅲ類と統合される。これは尾崎(1984)に指摘された傾向と一致しているが，同じ年齢層のインフォーマント(ce66f，ch62f，ci59m）においてこの傾向は見られなかった。

表7：札幌調査における語類とアクセント型の対応関係（1モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪		①	
東京	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ca30f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ca33f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ci59m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ch62f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ce66f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
cd62f	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ

4.1.2. 網走調査

網走の調査では，インフォーマント一部は共通語や道東方言の先行研究(平山，1957)（小野，1992)と一致した結果を示した。つまり，Ⅰ類とⅡ類が⓪であり，Ⅲ類が①であった。ただし，他のインフォーマントは(eb15m，ec50f，ej61m，ek59f，el60f)Ⅱ類が①となり，Ⅲ類と統合さ

表8：網走調査における語類とアクセント型の対応関係（1モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪		①	
東京	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
釧路，網走，北見など（平山，1957）	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ea34f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ee58f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
ef58f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
eh69m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
eb15m	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ
ec50f	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ
ek59f	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ
el60f	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ
ej61m	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ

れる。主にこの傾向は 50 代以上の話者で見られたが，eb15m も同じパターンであり，母親である ec50f から受け継いだ特徴である可能性があると考えられる。

4.1.3. 小平調査

小平町の調査においては，共通語と異なる用例はなく，語類とアクセント型の対応関係も変わらない。つまり，Ⅰ・Ⅱ類が⓪，Ⅲ類が①である。

表 9：小平調査における語類とアクセント型の対応関係（1 モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪		①
東京	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
nc47f	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
na52f	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
nb63m	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ

4.1.4. 七飯調査

Ⅰ類において例外となる用例がなく，⓪で安定していた。Ⅱ類は，網走調査や道南方言の先行研究で観察された①で発音する傾向はなく，全員「葉」と「日」を⓪で，「矢」のみを①で発音した。「矢」は共通語でも①であるため，方言の特徴的な例外ではないと思われる。最後に，Ⅲ類は①であり，例外はなかった。以下の表は語類とアクセントの対応関係を示す。

表 10：七飯調査における語類とアクセント型の対応関係（1 モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪		①	
東京	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
札幌・函館，帯広など（平山，1957）	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ
sf25f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
se41m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
sb41m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
sc33f	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
sa59m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
sd60m	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ

4.2. 2 モーラ名詞

4.2.1. 札幌調査

第Ⅰ類は全て⓪であり，例外はなかった。Ⅱ類において ci59m，cd62f と ce66f は⓪の用例が過半数であり，ch62f の用例は⓪と②に均等に分かれていた。他のインフォーマントの用例はほ

とんど②であったが，「紙」，「橋」，「梨」において⓪が残存しているインフォーマントもいた。II類の用例を全体的に見れば，２モーラ目の母音がアクセント型の選択に影響を及ぼす可能性があることが分かる。広母音で終わる３語（川，旗，胸）の 18 例中で，12 例（66%）が②である。一方，狭母音で終わる７語の 42 例の中で，17 例のみ(40%)が②となり，⓪が優勢である。2.2 節の表３が示すように，この傾向は他の地域でも見られる。III類の用例はほぼすべて②であり，共通語と一貫している。例外は少ないが，尾崎（1984）で指摘されたように，「栗」の用例は全て⓪であり，これは方言の特徴的な発音として考えていいだろう。「熊」は共通語で①と②が見られ，札幌のインフォーマントでも用例が分かれている。ce66f，ca30f は①であり，他は②であった。

IV・V類においては，ca30f と cb33f はの用例はほぼ全て①であったが，ci59m，ch62f，cd62f，ce66f は２モーラ目の母音によってアクセント型が決まる傾向を保っていた。ただし，ce66f においてこの傾向はIV類のみで窺われ，V類はほとんど①と発音した。これは他の北海道諸方言でも見られる現象であるという。例えば，名寄方言に関して，小野（1993）は「IV類よりもV類の方が早く１型への統合傾向を見せている」と述べている (p.244)。２モーラ目の母音によってアクセント型が決まるインフォーマントにおいても例外的な発音がある。例えば，「舟」，「鮭」の２モーラ目が広母音を含むのに，用例の大部分は①であった。一方，狭母音で終わる「眉」は②が多かった。

(10)

A グループ	I・II	⓪
	III	②
	IV（狭）・V（狭）	①
	IV（広）・V（広）	②
B グループ	I・II（狭）	⓪
	II（広）・III	②
	IV（狭）・V（狭）	①
	IV（広）・V（広）	②
C グループ	I	⓪
	II・III	②
	IV（狭）・V（狭）	①
	IV（広）・V（広）	②
D グループ	I	⓪
	II・III	②
	IV・V	①

このデータに基づいて，アクセント体系は同じでも，語類とアクセント型の対応関係はにお

いては様々なパターンが共存していることが明らかであり，そのうち一つだけを方言の代表パターンとして選ぶことが難しい。しかし，このパターンによって，話者を(10)のグループに分けることができる。

言語島を除き，A パターン北海道全地域の方言の伝統的なパターンであると考えられる。また，北海道方言のみならず，東京式外輪アクセントの典型的な対応関係であり，秋田（佐藤，1982）・青森（北条，1982）方言などで見られる。

D は東京方言と一致するパターンであり，B と C は過渡期パターンであると考えられる。なお，各類において，例外的な振る舞いを示す語や母音による分離があることによって，単にある類の多数形アクセントだけを基準として分けることが不適切だと考えられる。それ故に，(11)の基準によって話者を分類し，表 11 でパターンの分布を示す。

(11)

A	II類：2 モーラ目の母音が広い語・狭い語においても⓪が多数形である。 Ⅳ類・Ⅴ類：例外なく①である「鎌」,「舟」,「鮭」,「蜘蛛」および例外なく②である「眉」以外に，2 モーラ目が広い語の多数形は②である。
B	II類：2 モーラ目の母音が狭い語において⓪が多数形である。 Ⅳ類・Ⅴ類：例外なく①である「鎌」,「舟」,「鮭」,「蜘蛛」および例外なく②である「眉」以外に，2 モーラ目が広い語の多数形は②である。
C	II類：2 モーラ目の母音が広い語・狭い語においても②が多数形である Ⅳ類・Ⅴ類：例外なく①である「鎌」,「舟」,「鮭」,「蜘蛛」および例外なく②である「眉」以外に，2 モーラ目が広い語の多数形は②である。
D	II類：2 モーラ目の母音が広い語・狭い語においても②が多数形である Ⅳ・Ⅴ類：2 モーラ目の母音が広い語・狭い語においても①が多数形である

表 11：札幌調査における語類とアクセント型の対応関係（2 モーラ名詞）

話者＼アクセント型	⓪								
東京	I		Ⅳ	Ⅴ	II	Ⅲ			
札幌・旭川・帯広（小野，1993）	I		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	II	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	
ci59m	I	II	Ⅳ（狭）	Ⅳ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	A
cd62f	I	II	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	A
ce66f	I	II（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	II（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	B
ch62f	I	II（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	II（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	B
ca30f	I		Ⅳ	Ⅴ	II	Ⅲ			D
cb33f	I		Ⅳ	Ⅴ	II	Ⅲ			D

4.2.2. 網走調査

Ⅰ類は⓪で，「紐」「滝」「蜂」を②に発音したインフォーマントはいたが，類を全体的に見れば例外的な用例は非常に少ない。Ⅱ類は，eh69m の用例は大部分が⓪で，ej61m の用例は⓪と②に均等に分かれている。他の話者は主に②であったが，⓪が残存している語彙もあった。例えば，上記の 2 人のとは別に，ea34f，el60f は「紙」を⓪に発音した。また，「梨」は共通語では⓪と②が両方認められるのに対して，網走のインフォーマントは全員⓪に発音した。Ⅲ類の語彙はほぼ全員が②に発音し，ej61m のみが「犬」，「米」，「花」を⓪に発音した。ただし，「栗」は全員が⓪に発音したことから，方言の特徴的な発音と考えることができる。また，共通語では①と②が認められる「熊」については， 9 人のうちに 7 人が①に発音した。

Ⅳ類は ea34f，eb15m，ec50f，ef58f，ek59f の用例は殆ど①であり，共通語と一致しているパターンである。他のインフォーマントは，根室方言でも指摘された語彙の 2 モーラ目の母音によってアクセント型が決まる傾向が窺われた。さらに，ea34f など主に①を使用するインフォーマントも，ある語彙において方言の特徴的な発音が保たれている。例えば，10 人のインフォーマントが「味噌」を①に発音し， 9 人が「糸」を①に発音した。一方， 2 モーラ目の母音によってアクセント型が決まるインフォーマントにおいても例外がある。例えば，「舟」の 2 モーラ目が広母音を含むのに，①の発音が普通であった。最後に，「鎌」の用例は⓪が多かった。「鎌」の場合は「同音異アクセント語」による干渉があるようである。「鎌」を②に発音したら，Ⅲ類の「釜」と完全に同じ発音になる。混同を避けるため，「鎌」を⓪に発音することが好ましいかと思われる。

表 12：網走調査における語類とアクセント型の対応関係（ 2 モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪				②				
東京	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			
eh69m	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅳ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	A
ej61m	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	B[9]
el60f	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	C
ee58f	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	C
ek59f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
ef58f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
ec50f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
ea34f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
eb15m	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D

[9] ej61m は⓪ 6 例，② 4 例であったが，主に 2 モーラ目の広い語を⓪にし，異常なパターンであった。

Ⅴ類はⅣ類と似たパターンを示す。ea34f，eb15m，ec50f，ef58f，ek59f の用例は殆ど①であるのに対して，他のインフォーマントは類が 2 モーラ目の母音によって分かれている。しかし，Ⅴ類はⅣ類よりゆれが多いと考えられる。例えば，広母音で終わる「蜘蛛」，「鮭」は殆ど①であるが，狭母音で終わる「眉」は②が多かった。

4.2.3. 小平調査

第Ⅰ類は例外なく⓪である。Ⅱ類は，nb63m と na52f において主に⓪であり，Ⅰ類と統合している。一方，nc47f においては主に②であり，Ⅲ類と統合される共通語のパターンである。先行研究で指摘された，2 モーラ目の母音が広い語彙を中心に⓪が②に変化する傾向は観察されなかった。例えば，nb63m において②に変化したものは「冬」と「肘」であり，狭母音で終わる語彙だけである。na52f は「胸」を②に発音したが，「旗」，「川」を⓪のままに発音した。また，nc47f は「冬」，「梨」を⓪に発音したが，「町」「石」などが②になり，明らかな傾向を指摘できない。Ⅲ類の用例は殆ど②でり，例外は na52f の「栗」のみである。これは網走調査のインフォーマントと一致しているが，他の小平インフォーマントは②であった。また，共通語では①と②が認められる「熊」に関して，全員が②に発音した。

Ⅳ類は，他の北海道諸方言および小野（1993）の結果と一致し，2 モーラ目の母音によってアクセント型が決まる傾向が観察された。この傾向は明確であり，網走調査において例外となった「舟」も完全に②であった。例外は「鎌」のみであり，アクセント型は共通語の①ではなく，⓪と②に分かれていた。「鮭」の場合は「同音異アクセント語」による干渉が生じた可能性がある。助詞をつけず「鮭」を②で発音したら，⓪の「酒」と同じ音調型になるため，①が好ましいかと思われる。

Ⅴ類も，母音によってアクセント型が決まるパターンを示すが，Ⅳ類よりゆれが多い。例えば，広母音で終わる「鮭」の用例は全て①であるが，狭母音で終わる「眉」は②が多かった。また，nb63m は狭母音で終わる「牡蠣」，「足袋」をそれぞれ⓪，②にした。表 13 に語類とアクセント型の対応関係を示す。

表 13：小平調査における語類とアクセント型の対応関係（2 モーラ名詞）

アクセント型 / 話者	⓪				②				
東京	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			
小平（小野，1993）	Ⅰ	Ⅱ（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	
nb63m	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	A
na52f	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	A
nc47f	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	C

4.2.4. 七飯調査

Ⅰ類は⓪で安定していた。例外となる用例は 1 つのみあり，sb41m が「鼻」を②で発音し，「花」との区別はなかった。Ⅱ類は，sb41m と sc33f は②で，⓪の用例は共通語でも⓪が認められる「梨」のみであった。しかし，他のインフォーマントの用例において，様々な程度で共通語と異なる用例が観察された。sa59m，se41m とも「橋」，「紙」，「石」，「川」，「冬」，「梨」が⓪であり，2 類語の大部分を占めた。sd60m は主に②であったが，「旗」，「石」，「紙」，「梨」の 4 語は⓪で発音した。sf25f は「梨」に加えて，「橋」も⓪となった。「梨」を含めて，⓪の用例は主に 2 モーラ目が狭母音で終わる語に現れた。20 例中，広母音で終わる語は「川」（2 例）と「旗」（1 例）のみであった。この現象は小平方言のアクセントでも指摘されたため（小野，1993），北海道諸方言においてアクセント核が狭母音の音節に置きにくい傾向があると考えられる。

Ⅲ類の用例は殆ど②であり，共通語に準じた。例外としては，sf25f は「米」，sa59m は「舌」を⓪で発音したことが挙げられる。「栗」は 6 人のうちに sa59m，sb41m，sc33f，sf25f が⓪で発音し，これは札幌方言でもみられる北海道方言固有のアクセントだと考えられる。また，共通語では①と②が認められる「熊」については，同じ 4 人が①で発音した。sd60m と se41m は「栗」，「熊」ともを②で発音した。

Ⅳ類は sb41m，sc33f，sf25f の用例は殆ど①であり，共通語と一致しているパターンであった。sa59m，sd60m，se41m においては，2 モーラ目の母音によってアクセント型が決まる傾向が窺われ，広いもの（/a/, /e/, /o/）は②であり，狭いもの（/i/, /u/）は①である。さらに，主に①を使用するインフォーマントも，ある語彙において方言アクセントを保っていた。例えば，sb41m は「肩」と「糸」を，sc33f は「糸」を，sf25f は「鎌」，「肩」と「糸」を②にした。一方，2 モーラ目の母音によってアクセント型が決まるインフォーマントにおいても例外があった。例えば，「舟」は 2 モーラ目が広母音を含むのに，se41m のみが②で発音し，他は①であった。

表 14：七飯調査における語類とアクセント型の対応関係（2 モーラ名詞）

話者＼アクセント型	⓪				②				
東京	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			
函館（小野，1993）	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ（狭）	Ⅳ（狭）		Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	
sa59m	Ⅰ	Ⅱ（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	B
se41m	Ⅰ	Ⅱ（狭）	Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ（広）	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	B
sd60m	Ⅰ		Ⅳ（狭）	Ⅴ（狭）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ（広）	Ⅴ（広）	C
sb41m	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
sc33f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D
sf25f	Ⅰ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅱ	Ⅲ			D

Ⅴ類はⅣ類と類似したパターンを示す。sb41m，sc33f，sd60m，sf25f の用例は殆ど①であったのに対して，sa59m と se41m が 2 モーラ目が広母音を含む語を②で発音する傾向を示した。しかしⅤ類において，Ⅳ類よりこの傾向に逆らう例外が多いと考えられる。例えば，広母音で終わる「蜘蛛」，「鮭」は殆ど①であるが，狭母音で終わる「眉」は②が多かった。表 2 は語類とアクセント型の対応関係をまとめる。

4.3. 3 モーラ名詞

4.3.1. 札幌調査

Ⅰ類の用例が完全に⓪であった。Ⅱ類において，全員「東」を⓪，「二つ」，「娘」を③にした。「小豆」は，ca30f，cd62f が③で，他の話者が⓪であった。Ⅲ類において「小麦」，「岬」，「黄金」は例外なく⓪であった。ただし，「力」は若年層が②，高年層が③を使用した。Ⅳ類は主に③であるが，ci59m は完全に②であった。また，ch62f，ce66f そして ca30f が様々な程度に②の用例を示した。Ⅴ類は，cb33f と ca30f が共通語と一致していた（つまり，「枕」，「涙」，「アワビ」が①であり，「油」が⓪である）。cd62f も似たパターンを示したが，「枕」を②に発音した。しかし，他の話者は主に②であった。Ⅵ類の多くは⓪であったが，「背中」において個人差が大きく，⓪・②・③の用例が見られた。Ⅶ類は，「卵」が②で，他の語は⓪であるの一般的なパターンであったが，「苺」において①（ci59m）と②（ce66f）の用例もあった。全体的にみると，3 モーラ名詞のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ類のアクセントはおおよそ安定しており，共通語と一致している。しかし，Ⅳ・Ⅴ類に注目すれば，ヴァリエーションが見られる。表 15 は類とアクセント型の対応関係をまとめる。

表 15：札幌調査における語類とアクセント型の対応関係（3 モーラ名詞）

ア型 / 話者	⓪					①	②				②	
東京	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ					Ⅱ	Ⅳ
ci59m	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	（Ⅵ）	Ⅶ		Ⅳ	Ⅴ	（Ⅵ）		（Ⅱ）	
ce66f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	Ⅵ	（Ⅶ）		Ⅳ	Ⅴ	（Ⅶ）		（Ⅱ）	
ch62f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ			Ⅴ			（Ⅱ）	
cb33f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ					（Ⅱ）	Ⅳ
cd62f	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ					Ⅱ	Ⅳ
ca30f	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ					Ⅱ	Ⅳ

4.3.2. 網走調査

Ⅰ類は⓪であり，例外はない。Ⅱ類は「二つ」と「娘」が完全に③であるが，「小豆」全員⓪である。「東」は③と⓪が共通語で認められているが，インフォーマントの用例は殆どが⓪あり，③は 2 例のみだった。その結果，Ⅱ類が⓪と③に分かれているのは一般的なパターンであった。

Ⅲ類において，５人が「力」を③に発音し，３人が②に発音した，一人が①に発音した。他の語は⓪で，例外は少なかった。Ⅳ類は共通語で完全に③であるが，網走インフォーマントにおいて②と⓪の用例も多く見られ，ばらつきが激しい。「男」のみが安定したパターンを見せ，例外なく③であった。一方，「頭」は特に非標準的な発音が多く，⓪と②は用例の過半数を占めた。

Ⅴ類もゆれが多いが，共通語では「アワビ」，「枕」，「涙」が①であるのに対して，②の用例が多かった。「油」は共通語に揃い，⓪に発音したインフォーマントは４人いたが，他に③と②は用例も観察された。Ⅵ類は主に⓪であり，例外は少ないが，ee58f が「背中」と「兎」を②に発音し，類が分かれていた。最後に，Ⅶ類においては「鯨」，「辛子」が⓪，「卵」が②であるのが一般的であった。ただし，「苺」は①•②の例外が多く，そして「鯨」，「辛子」において⓪と③の区別があいまいである傾向も見られた。表 16 に語類とアクセント型の対応関係をまとめる。

表 16：網走調査における語類とアクセント型の対応関係（３モーラ名詞）

ア / 話者	⓪						①	②					③		
東京	Ⅰ		Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ						Ⅱ	Ⅳ	
eh69m	Ⅰ		Ⅲ	(Ⅳ)	Ⅵ	Ⅶ							(Ⅱ)	Ⅳ	
ej61m	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ						(Ⅱ)	Ⅳ	
el60f	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ				Ⅳ	Ⅴ		Ⅶ	(Ⅱ)		
ee58f	Ⅰ	(Ⅱ)	(Ⅲ)		Ⅵ	Ⅶ		(Ⅲ)	Ⅳ	Ⅴ	(Ⅵ)	Ⅶ	(Ⅱ)		
ek59f	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ						(Ⅱ)	Ⅳ	
ef58f	Ⅰ		Ⅲ			(Ⅶ)				Ⅴ			Ⅱ	Ⅳ	Ⅶ
ec50f	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ		(Ⅳ)				(Ⅱ)	(Ⅳ)	
ea34f	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ						(Ⅱ)	Ⅳ	
eb15m	Ⅰ	(Ⅱ)	Ⅲ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ		(Ⅳ)				(Ⅱ)	(Ⅳ)	

表 16 に示すように，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ類はおおよそ安定しており，共通語と一致しているのである。これらの語類において，組織的に異なる点としてⅡ類が⓪と③に分かれていることだけが挙げられる。しかし，札幌調査と同じく，Ⅳ・Ⅴ類のアクセントは②が多く，北海道方言の伝統的な姿を反映している。

4.3.3. 小平調査

３モーラ名詞は，Ⅰ類が完全に⓪であり，共通語や網走のインフォーマントと一致している。Ⅱ類は全員が「小豆」を⓪，「二つ」と「娘」を③に発音した。共通語で⓪と③が認められる「東」は全員⓪に発音したので，網走インフォーマントと同じく類が均等に分かれている。Ⅲ類は原則として⓪であったが，nb63m は「力」を③に発音し，na52f は「力」を③にし，「小麦」を②に発音した。Ⅳ類は主に③だったが，na52f が「刀」を②に発音した。Ⅴ類は，全員が「涙，枕，油」を③，「アワビ」を②にした。

Ⅵ類は用例が多様であった。nb63m は「鼠」が③，他の語は⓪であった。nc47f は全て②であった。na52f は「狐」が②，他の語は③であった。最後に，Ⅶ類にも型のばらつきが多い。全員「卵」を②，「鯨」を⓪に発音したが，「苺」は nb63m が③，nc47f が⓪，na52f が②に発音した。「辛子」は nb63m，nc47f が③，na52f が②に発音した。以上の結果を表 17 にまとめる。

表 17：小平調査における語類とアクセント型の対応関係（ 3 モーラ名詞）

話者＼アクセント型	⓪					①	②		③				
東京	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ			Ⅱ	Ⅳ			
nb63m	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	Ⅵ					（Ⅱ）	Ⅳ	Ⅴ		Ⅶ
na52f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ					Ⅶ	（Ⅱ）	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	
nc47f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ		Ⅶ		Ⅵ		（Ⅱ）	Ⅳ	Ⅴ		

このデータの興味深い点としては，①に属する類がないことが挙げられる。語類の所属に関して，Ⅰ・Ⅲはおおよそ安定している。Ⅱ類も安定した分布を示すが，網走と札幌のインフォーマントと同じく，⓪と③を跨っている。札幌や網走インフォーマントと異なり，Ⅳ類Ⅴ類も安定しており，ばらつきが少ない。また，札幌や網走において②が多いのに対して，小平ではⅣ・Ⅴ類とも③に所属している。しかし，Ⅵ・Ⅶ類はばらつきが激しく，同じ単語でも，３人のインフォーマントの用例が分かれていることもある。例えば，「背中」の用例は⓪，②，③であった。北海道諸方言において，これは決して珍しい現象ではない。例えば，小平町と同じ留萌支庁に位置する増毛町の調査（北海道方言研究会，1978）によると，同じ語彙で⓪，①，②，③などのアクセント型が観察されたという（p.50）

4.3.4. 七飯調査

Ⅰ類は⓪で，例外は見られなかった。Ⅱ類は「二つ」と「娘」が完全に③であったが，「小豆」と「東」の発音において多少の個人差があった。「東」は sa59m，sd60m，se41m は③，他は⓪であった。「小豆」は sd60m が③となったが，他には⓪が多く，他の北海道諸方言でも見られる固有アクセントと思われる。Ⅲ類において，「黄金」が⓪，「力」が③で安定していた。「小麦」および「岬」は用例の大部分は⓪であったが，sd60m，se41m とも「小麦」をは②と発音し，「岬」を③にした。Ⅳ類の語ではほぼすべての③であるが，⓪の用例も 2 つ見られた。Ⅴ類において，共通語では「アワビ」，「枕」，「涙」が①であるのに対して，②の用例が多く，③の用例もいくつか窺われた。「油」は⓪で発音した話者が 2 人いたが，他は③であった。Ⅵ類は主に⓪であり，例外は少なかったが，se41m が「背中」，「鼠」，「兎」を②と発音した。最後に，Ⅶ類は「鯨」が例外なく⓪であったが，他の語においてまとまりが少なかった。「辛子」は③が多数であったが，⓪と②の用例もあった。「卵」と「苺」の用例は⓪と②に分かれていた。表 3 に語類とアクセント型の対応関係をまとめ，共通語での所属と異なる語類はハイライトされている。

表 18：七飯調査における語類とアクセント型の対応関係（3 モーラ名詞）

ア型 / 話者	⓪					①	②			③			
東京	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅴ				Ⅱ		Ⅳ	
sf25f	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ		Ⅴ			Ⅱ		Ⅳ	
se41m	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ			Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
sb41m	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ	Ⅵ			Ⅴ		Ⅶ	（Ⅱ）		Ⅳ	
sc33f	Ⅰ	（Ⅱ）	Ⅲ				Ⅴ			（Ⅱ）		Ⅳ	
sa59m	Ⅰ		Ⅲ	Ⅵ	Ⅶ		（Ⅴ）			Ⅱ		Ⅳ	（Ⅴ）
sd60m	Ⅰ			Ⅵ	Ⅶ		（Ⅴ）			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	（Ⅴ）

このデータの興味深い点としては，①に属する類がないことが挙げられる。さらに，話者の用例の中で，①の用例は 1 つのみ（sf25f，「涙」）あった。その他，se41m は Ⅴ 類に加えて，Ⅵ類とⅦ類も②となった。その原因は，se41m は海岸方言が特に強いとされている松前町（石垣，1984）で生まれたからかもしれない。しかし，2 モーラ名詞と異なり，明らかなアクセント変化を指摘することは難しい。網走方言の調査において，話者が若いほどⅣ類と Ⅴ 類がそれぞれ③と①に発音される傾向が認められたが，七飯の話者においてはこの類は安定しているようである。

5．4 つの方言の対照考察

5.1．1 モーラ名詞

1 モーラ名詞においては，インフォーマントの大部分は共通語と一致している対応関係を示したが，Ⅱ類が①となり，Ⅲ類と統合されるインフォーマントは数人いた。この傾向は平山（1957）や尾崎（1984）によって指摘されたが，最近の調査でみられない。また，平山の結果に返して，Ⅱ・Ⅲのパターンは主に道東の網走に観察された。二つのグループの平均年齢の間に大きな差はないが，Ⅰ・Ⅱの統合は幅広い年齢層の話者において見られるのに対して，Ⅱ・Ⅲの統合を示したのは主に 60 代の話者であった[10]。尾崎（1984）が指摘したように，この特徴は衰退しつつあると考えられる。

5.2．2 モーラ名詞

上記のように，アクセント体系に変わりがなくても，語類とアクセント型の対応関係はにおいては様々なパターンが共存していることが明らかであり，このパターンによって，話者を表 21 のグループに分けることができる。以上，2 モーラ名詞の語類とアクセント型の対応関係に

[10] eb15m は例外であるが，母親である ec50f からこの特徴を受け継いだ可能性があると思われる。

表 19： 3 調査インフォーマントの対応関係（ 1 モーラ名詞）

語類とア型の対応関係 / 地域	Ⅰ（蚊）Ⅱ（葉）⓪	Ⅰ（蚊）⓪
	Ⅲ（木）①	Ⅱ（葉）Ⅲ（木）①
網走	ea34f ee58f ef58f eh69m	eb15m ec50f ek59f el60f ej61m
小平	nb63m na52f nc47f	
札幌	ca30f cb33f ce66f ci59m	ch62f cd62f
七飯	sf25f se41m sb41m sc33f sa59m sd60m	
話者の平均年齢	48.7	52.7

よって調査のインフォーマントを 4 つのグループに分類できることを示した。 4 調査とも同様に，所属グループは主にインフォーマントの年齢に関わるようである。A のインフォーマントが最高齢であり，A → B → C → D の順にその平均年齢が低くなる。このような現象は，主に二つの捉え方がある。まず，それぞれの世代のことばの違いがその人たちがその言語を獲得した当時の実態をそのまま映し出していることを想定して[11]，世代差は言語･方言における進行中の「言語変化」の段階として捉えることができる。または，ことばの違いは個人語における「生涯変化」の結果であり，単に各年齢層に特有の言語特徴（例えば，「若者ことば」）を反映する年齢階層として捉えることもできる。

本調査の結果を先行研究の結果と比べると，生涯変化が起きたていないと思われる。小野（1993）によると，D パターンは当時の 30 代半以下（現代の 50 代半以下）の年層に共通しているものである（p.247)。本調査では，調査地によって違いがあり，例外もあるが，55 代半以下のインフォーマントはおおよそ D パターンである。即ち，小野の調査から約 20 年経ったため，年齢の境がずれたが，90 年代に伝統的なな対応関係を持っていた世代は今でもその特徴を保っており，各話者のアクセントがこの 20 年の間に安定していると考えられる。また，札幌方言の

[11] いわゆる「見かけ上の時間」解釈。

表 20： 4 調査インフォーマントの対応関係（ 2 モーラ名詞）

語類とア型の対応関係 / 調査地	A		B		C		D	
	Ⅰ（滝） Ⅱ（川）	⓪	Ⅰ（滝） Ⅱ狭（冬）	⓪	Ⅰ（滝）	⓪	Ⅰ（滝）	⓪
	Ⅲ（山） Ⅳ広（味噌） Ⅴ広（雨）	②	Ⅱ広（川） Ⅲ（山） Ⅳ広（味噌） Ⅴ広（雨）	②	Ⅱ（川） Ⅲ（山） Ⅳ広（味噌） Ⅴ広（雨）	②	Ⅱ（川） Ⅲ（山）	②
	Ⅳ狭（海） Ⅴ狭（猿）	①	Ⅳ狭（海） Ⅴ狭（猿）	①	Ⅳ狭（海） Ⅴ狭（猿）	①	Ⅳ（味噌・海） Ⅴ（猿・雨）	①
網走	eh69m		ej61m		el60f ee58f		ek59f ef58f ec50f ea34f eb15m	
小平	nb63m na52f				nc47f			
札幌	cd62f ci59m		ch62f ce66f				cb33f ca30f	
七飯			se41m sa59m		sd60m		sf25f sc33f sb41m	
話者の平均年齢	61		57.8		56.3		37.8	

アクセント生涯変化に注目した高野（2011）の結果もこの解釈と照応し，「大多数の話者において「生涯変化」と言えるほどの経年的変化は確認できなかった。本調査に関する限り，「見かけ上の時間」解釈に基づく言語変化研究の妥当性や言語の諸領域で最も変わりにくいのは音韻面だとする一般化を支持する結果が得られたと言える」と述べている（p.12）。これが暗示するのは，A，B，C，D は北海道方言における進行中の言語変化の段階であることである。

方言の語類とアクセント型の対応関係は，高年齢層のインフォーマントが所属する A パターンから，若年層が所属する D パターンしつつあり，移行期の間に 4 つのパターンが共存している。なお，D グループに幅広い年齢層のインフォーマントが所属している。例えば，59 歳の ek59f も 24 歳の sf25f も D パターンである。そのため，C → D への変遷が起きた以来，更なるアクセント変化が起きていないと考えられる。即ち，アクセント型と語類の対応関係の面では，いわゆる「新方言」の成立を示唆する証拠はない。

以上に指摘したアクセント変化は，方言の内部から自然に起きたものではないことが明らかである。金田一（1975）によると，方言の内部で起きるアクセント変化の中で，音韻変化に属するものがあり，そして形態変化に属するものがある（p.92）。前者は，規則的な変化を起こす性質がある。しかし，以上で記述した変化は音韻的な規則性はないと考えられる。例えば，語彙の音韻的構造や音韻環境が同じであっても，Ⅳ・Ⅴ類の②は①に変化して行くのに対して，

Ⅲ類の②は①に変化しない。また，形態変化に属する変化は，一定の範囲に限られている変化であり，２モーラ名詞において窺われた大幅な変化とは異なる。さらに，いったん統合したⅡ類とⅠ類の区別が，再び元の区別を復元して分離することは，徳川（1978）の統合の原則を違反する変化である。そのため，以上に説明したアクセント変化は方言の外部で起きた変化，いわゆる「接触変化」（小林，2008）として解釈したほうがいいことである。さらに，ここで示した変化は，以前共通語と異なっていた類のみで起きたため，全国各地でみられる共通語との接触による変化であると考えられる。

２モーラ名詞の本来のアクセントにおいて，それぞれの調査地によって大きな差がないと考えられる。つまり，上記で説明した接触変化の本質は，全地域において共通である。しかし，地方によって変化の程度が異なるようである。例えば，網走の 60 代以下のインフォーマントは殆ど C パターンであるのに対して，小平調査の nc47f はや七飯調査の se41m は B はまだ共通語と一致しない特徴を保っており，それぞれ C と B グループに入る。しかし，話者のサンプルがまだ小さいため，現時点では決定的な結論は導き出せない。例えば，札幌調査において 40 代のインフォーマントがいないので，共通語化プロセスは他の地域と比べることが難しい。

5.3. ３モーラ名詞

表 21 が示すように，Ⅰ類は全地域で⓪に落ち着いている。Ⅱ類は「娘」と「二つ」は例外なく③であるが，「東」と「小豆」の用例において⓪が多く，類の所属が⓪と③の間に揺動する。Ⅲ類は主に⓪であるが，七飯に③の話者が二人いた。同様に，Ⅵ とⅦ類の所属語彙はまとまりが低いが，全体的に見れば⓪が優勢である。一方，Ⅳ類とⅤ類において，調査地域と個人の話者によって大量のヴァリエーションが観察される。まず，Ⅳ類は海岸地域の小平と七飯では，異例がなく③に安定している。ただし，札幌，網走の場合は，②の用例も多い。また，Ⅴ類は七飯が②，小平が③に安定しているが，札幌・網走では，インフォーマントが若いほど②が消え，共通語的な①に置き換える傾向が見られた。

１モーラ名詞や２モーラ名詞と異なり，３モーラ名詞の語類とその所属語の関係は明確でない場合が多く，その対応関係によって話者をグル―プにまとめることも難しい。なぜ３モーラ名詞においてアクセント型の対応関係に多様性が多いのはまだ明らかではない。しかし，アクセントの弁別的な機能と関わるかもしれない。Kitahara（2001）は，認識実験を通じて，日本語の２モーラ語において聞き手の認識のためにアクセント核の位置が最も基礎的な手がかりであることを示す。一方，３モーラ語においてアクセント核の有無がより重要であるという。そのため，３モーラ語においてアクセント核の位置が比較的重要な役割を果たさなく，位置のゆれが多く生じる可能性がある。それにも関わらず，主な傾向を指摘することが可能である。

３モーラ名詞のアクセント型を全体的に見れば，②の用例が多いこが顕著である。これは根室方言などの北海道諸方言において，先行研究が指摘した特徴でもある。しかし，3.1 節で述べ

表 21： 4 調査インフォーマントの対応関係（ 3 モーラ名詞）

		Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類
	共通語	⓪	③	⓪	③	①	⓪	⓪
札幌	ca30f	⓪	③	⓪	③	①	⓪	⓪
	cb33f	⓪	⓪・③	⓪	③	①	⓪	⓪
	ci59m	⓪	⓪・③	⓪	②	②	⓪・②	⓪
	cd62f	⓪	③	⓪	③	①	⓪	⓪
	ch62f	⓪	⓪・③	⓪	③	②	⓪	⓪
	ce66f	⓪	⓪・③	⓪	②	②	⓪	②・⓪
網走	eb15m	⓪	⓪・③	⓪	②・③	①	⓪	⓪
	ea34f	⓪	⓪・③	⓪	③	①	⓪	⓪
	ec50f	⓪	⓪・③	⓪	②・③	①	⓪	⓪
	ee58e	⓪	⓪・③	⓪・②	②	②	⓪	②
	ef58f	⓪	③	⓪	③	②	⓪	⓪・③
	ek59f	⓪	⓪・③	⓪	③	①	⓪	⓪
	el60f	⓪	⓪・③	⓪	②	②	⓪	②
	ej61m	⓪	⓪・③	⓪	③	①	⓪	⓪
	eh69m	⓪	③	⓪	⓪・③	②	⓪	⓪
小平	na52f	⓪	⓪・③	⓪	③	③	③	②
	nc47f	⓪	⓪・③	⓪	③	③	②	⓪
	nb63m	⓪	⓪・③	⓪	③	③	⓪	③
七飯	sf25f	⓪	③	⓪	③	②	⓪	⓪
	sc33f	⓪	⓪・③	⓪	③	②	⓪	⓪
	sb41m	⓪	⓪・③	⓪	③	②	⓪	②
	se41m	⓪	③	③	③	②	②	②
	sa59m	⓪	③	⓪	③	②・③	⓪	⓪
	sd60m	⓪	③	③	③	②・③	⓪	⓪

たように，Ⅴ類の語（「涙」，「枕」，「アワビ」など）は以前共通語でも②であり，①へ変化してきた。そのため，②が多いことは北海道諸方言の特有な現象ではなく，東京式アクセントの古い形式が残存している結果の可能性がある。

6．まとめ

本稿では，4 方言の現地調査の結果に基づき，和語名詞を中心に北海道方言のアクセントを記述し考察した。1 モーラ和語名詞は，アクセント型に所属する語彙において若干のヴァリエーションが見られたが，多くの場合は方言のアクセントが共通語と一致していた。2 モーラ和語名詞に関しては，各地でアクセント変化を指摘し，その変化を接触変化として解釈し，また，地方によって共通語化の程度が異なることが分かった。3 モーラ名詞は，語類とアクセント型の対応関係が明確ではない場合が多く，結論を導き出すことが難しいが，網走・札幌方言のⅣ・

Ⅴ類名詞において話者の年齢と関わるアクセント変化が観察された。また，小平方言・七飯方言の 3 モーラ名詞アクセント①に属する語彙項目がないことが判明された。今後の課題としては。まだこの名詞調査の範囲を拡大し，分析を深める必要がある。例えば，小平のインフォーマント数が少なかったため，アクセント変化のプロセスについてまだ不明な点がいくつか残っている。さらに，本稿では，和語名詞のアクセントに焦点を当てて論じてきたが，今後外来語・動詞・形容詞のアクセントも取り組むべき重要課題であると考えられる。

（だりん　とーます・言語文学専攻）

参考文献

石垣福雄（1983）『北海道諸方言辞典』北海道新聞社
上野善道（1989）「日本語のアクセント」杉藤美代子（編）『講座日本語と日本語教育 2　日本語の音声・音韻（上）』p.178–205　明治書院
尾崎喜光（1984）『札幌市のアクセント』北海道方言研究会会報　第 7 号
小野米一（1988）『北海道におけるアクセントの均一化傾向について』北海道方言研究会会報　第 23 号
小野米一（1992）『北海道根室方言のアクセント』北海道方言研究会会報　第 44 号
小野米一（1993）『北海道方言の研究』学芸図書
金田一春彦（1974）『国語アクセントの歴史研究 ── 原理と方法』塙書房
金田一春彦（1975）『日本の方言：アクセントの変遷とその実相』
金田一春彦（1977）「方言のアクセントの違いの現状」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語 11　方言』岩波書店，p.144–157
金田一春彦（監修），秋永一枝（編）（2002）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂，第 4 刷
国立国語研究所（1965）『共通語化の過程 ── 北海道における親子三代のことば ──』国立国語研究所報告 27　秀英出版
小林隆，木部暢子，高橋顕志，安部清哉，熊谷康雄（2008）『方言形成』シリーズ言語学 1　岩波書店
佐藤稔（1982）「秋田県の方言」。飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 ── 北海道・東北地方の方言』p.271–295　国書刊行会
柴田武（2003）『日本全土の方言』月刊言語，第 32 巻 1 月号，pp.26–29
高野正司（2011）『札幌方言名詞アクセントの実時間研究〜山鼻地区パネル調査中間報告』北海道方言研究会会報　第 88 号
竹本拓也（2010）「北海道帯広市方言のアクセント」『方言・音声研究』第 4 号　pp.1–53
徳川宗賢（1978）「日本諸方言アクセントの系譜」柴田武・加藤正信・徳川宗賢編『日本の言語学第 6 巻』大修館書店，p.543–569
芳賀綏（1961）「方言の実態と共通語化の問題点」遠藤嘉基 等編『方言学講座　第 2 巻』pp.100–127
平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
北条忠雄（1982）「東北方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 ── 北海道・東北地方の方言』p.149–177　国書刊行会
Kitahara, Mafuyu (2001) *Category structure and function of pitch accent in Tokyo Japanese*, Doctoral dissertation, Indiana University, Bloomington.